

山の  
恵みの  
映画たち  
2024  
プライベート



# 満山紅柿

べにがき  
まんざん

上山―柿と人とのゆきかい

## 🍊 山の恵みの映画たち2024 プライベート第2弾 🍊

「山の恵みの映画たち」は、山や自然に関する映画を集めた映画祭です。

この秋「山と人、そこに暮らすこと、生きること」をテーマに山形市で開催予定です。この映画祭を多くの方に知っていただきたく、プライベート上映会を連続開催します。

今回は上山市に縁の深い故小川紳介監督の作品をご紹介します。小川監督は日本を代表するドキュメンタリー映画作家で、上山市の財産と言える数々の傑作を残してくれました。

『満山紅柿』もその一つ。懐かしいあの頃、あの場所、上山市近隣にお住まいの方々に観てもらいたいドキュメンタリー映画です。是非ご来場ください。

日時：2024年 6月30日(日) 11:00 / 13:30 (2回上映・開場は各回30分前)

会場：上山城多目的ホール (定員35名・定員に達した場合はご入場いただけません。)

料金：無料 ※映画鑑賞は無料ですが、別途上山城入館料(一般420円、学生370円)が必要です。

主催：「山の恵みの映画たち」上映実行委員会 / 認定NPO法人 山形国際ドキュメンタリー映画祭 協力：公益財団法人 上山城郷土資料館

お問い合わせ ☎ 090-5838-6956 (高橋)

★16mmフィルムによる上映です。フィルムの質感を是非お楽しみください★

寒村の冬の収入源として始まった干柿作りは、自然と人間の営みの交錯点となり、里山に独特のリズムと息遣いをもたらし。

収穫、皮むき、乾燥、包装、出荷…。工程のひとつひとつに里山の人々の工夫が施され、小さな果実は人の手から人の手へと旅をする。鮮やかな紅柿たちが、地域の人々みなの子どもであるようで、なんとも愛おしい。

紅柿は里山に育まれ、干柿作りは里山に生きる人々をつなぐ。柿と里との類稀なる相思相愛。柿を語る人々の顔



# 紅柿 上山 まんざん べにがき

上山 - 柿と人とのゆきかい

が、こんなにもいきいきと輝くのはなぜだろう。

本作の元となる映像が小川プロにより撮影されたのは一九八四年のこと。「紅柿篇」として『1000年刻みの日時計 - 牧野村物語』(一九八六年公開)の一部となるはずだったが、干柿作りのシークエンスはお蔵入りに。小川の死後、幻の「紅柿篇」を完成させるべく地元の有志たちが立ち上がり、小川の最晩年に師事していた中国の彭小蓮に監督をオファー。師の残したフィルムに手を入れることを一度は断った彭であったが、五時間

半に及ぶ未編集のフィルムと創作ノートを引き継ぎ、牧野村での追加撮影を敢行してついに「紅柿篇」を完成させた。

小川が他界してから九年後の春、2001年のことだった。それからさらに月日は流れ、時代はますます加速度的に変化している。小川紳介が記録者としてどうしてもフィルムに収められなかったと語る、人と自然とが共存する里山の姿に、いまを生きる私たちは何を見出すのだろうか。在りし日の幻影か、懐古か、郷愁か…。

●出演  
木村修一/木村サト/渡辺金一/渡辺茂子/渡辺智春/中川トシ子/中川庄太郎/金子福治郎/酒井貞男/今野一/山川大治/山川修身/尾形勝志/佐々木誠市/佐々木喜美子/北沢正男/北沢政子/山口忠男/佐々木寛子

●スタッフ  
【第1期撮影 1984/11月-1985/1月】  
監督:小川紳介 助監督:飯塚俊男 撮影:田村正毅 現地録音:菊池信之  
【第2期撮影 1999/11月-12月】  
監督:彭小蓮(ボン・シャオリエン) 撮影:林良忠(ジョン・リン) 現地録音:菊池進平 現場制作:尾形充洸 通訳:劉含発(リュウ・ハンファ) 製作協力:安井喜雄  
【仕上げ】  
編集構成:彭小蓮(ボン・シャオリエン) 編集助手:見角貞利 整音:久保田幸雄 音楽:縄文太鼓 製作会社:上山名産・紅干柿の記録映画をつくる会  
共同製作:白石洋子 製作協力:プラネット映画資料図書館 提供:山形ドキュメンタリーフィルムライブラリー

日本/2001/16mm/90分/YIDFF 2001特別招待作品

山の  
恵みの  
映画たち  
2024

11/22(金)23(祭)24(日) フォーラム山形

主催:「山の恵みの映画たち」上映実行委員会  
認定NPO法人 山形国際ドキュメンタリー映画祭  
協力:フォーラム山形 後援:一般財団法人全国山の日協議会  
写真 浦山克彦

